

羽根田 治著

「山岳遭難の教訓」 — 実例に学ぶ生還の条件 —

日本に近代登山が根付いてから たかだか 100 年程にしかならないが、山での遭難事故は増えるばかり、石川五右衛門存命ならば「浜の真砂は尽きるとも、世に遭難の種は尽きまじ」と天を仰ぐに違いない。

そんな登山界にあって、今、精力的に山の遭難に取り組み、辛抱強く関係者への聞き取り調査を重ねて事故に至る原因を精査、追及し二度と同じ悲劇を繰り返すなと警鐘を鳴らしているのが、羽根田治氏である。

2000 年発行の「生還」以来、熱心に取材を重ね「気象遭難」「道迷い遭難」「滑落遭難」「山の遭難」と立て続けにドキュメントシリーズを刊行してきた著者が 5 年ぶりに発表した本書は、ここ 10 年程の遭難事故を対象としているだけに、読者の記憶も鮮明に残っていてインパクトのあるものとなった。

最初に 2006 年 3 月、谷川連峰・仙ノ倉山での「みろく山の会」の事例は、春の爆弾低気圧の影響を受け、急変する天候によりホワイトアウトに見舞われたパーティーは後から付いてくるはずの二人を見失い、はぐれた二人は最悪の結果となってしまったのであった。この事故の要因は「天候の読みが甘かった事」で「登山歴の長短や経験の多少をもってベテラン」と称するのは誤りなのだと説く。

同じ年の 10 月初め、白馬岳での事故はガイド登山中の遭難という事で耳目を集め、裁判沙汰にもなった。九州の山岳ガイド T 氏は 6 名の女性客を引率し黒部・祖母谷温泉から清水平を経て白馬岳を目指したが、季節外れの猛烈なブリザードに遭遇し、客 4 名を失うという大惨事になる。私は若い頃このルートを白馬岳から下った事があるが、下りでも 1 日掛かりの難コースでバテた事を思い出す。「遠方から来ているのだから、登りたい」という客の期待に応えたいというガイドの思いが裏目に出てしまったと云うが、善意の結果だからと許す事は出来ない。ガイドとして天候の見極めを見誤った責任はあまりにも重大だ。

その他、2006 年 4 月白馬乗鞍岳遭難（山スキーパーティー 5 名中 3 名死亡）、2007 年 12 月槍平キャンプ場雪崩事故（4 名死亡）等の検証が続き、2012 年 5 月・白馬小蓮華岳での北九州市の医師グループ遭難（6 名全員死亡）の記述へとなる。これは GW 中の低体温症による大量遭難として騒がれたもので記憶にも新しい。5 月ともなれば都会では春も終わって初夏の趣、しかし 3 千^{メートル}近いアルプスは一旦荒れ出したら真冬と同じなのである。急激な悪天候に遭遇した時、どの時点でどういう判断（計画続行か、撤退するか）を下すか、それを誤るから命を落とす事になるのだ。遠方から来たのだからと計画を強行してしまう。これは 2006 年 10 月のガイド山行とまったく同じと言える。又、6 名という人数にも問題があり、人数が多いとどうしてもペースが乱れ遅れがちになると著者は警告する。

ひとたび天候が崩れると厳冬期に逆戻りするゴールデンウィークの北アルプス。長野県警山岳救助隊の宮崎茂男隊長の「この時期は行きたい山に行くのではなく、行ける山に行ってもらいたい」という言葉を登山者は重く噛み締めるべきなのである。

2015 年 3 月「山と溪谷社」刊 800 円

(AKA)

